しめられているからである。これは理屈ではなく、人間存在の根底にある定めであり、創造に於ける自然としての事実なのである。

×　　×

イエスが愛について、人々に語られた言葉を求めるとき、だれもが示すことは、「よきサマリヤ人」の話である。

ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリヤ人は、側に来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れていって介抱した。そして翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。「この人を介抱してください。」さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。律法の専門家は言った。その人を助けた人です。そしてイエスは言われた。「行ってあなたも同じようにしなさい。」（ルカ福音書一〇章二五節以下）

この話を聞いた者が共通に抱く思いがある。それは、追いはぎに襲われて倒れている人を見捨てて去って行った祭司やレビ人（祭司の下にあって宗教的祭儀を司る宗教人）の無慈悲な行いに対する嫌悪感である。それにひきかえ自分の出来るかぎりの親切を行ったサマリヤ人に対しては、とてもすがすがしい思いをもつことができ、なにか救われた思いを自分の内に感じる。ましてや、当のサマリヤ人と倒れるユダヤ人とが宗教理解に於いて敵対関係にある間柄であると知るとき、彼の行ったことに驚きと感動すら覚えるに違いない。

×　　×

この話は、善行をするための教訓として語られたのではない。また、神さまを信じる者は、常にサマリヤ人のような自己犠牲の行いをしなくてはならない、という勧めでもない。

ここで示されていることは、人間の存在の根源に働く事実の何であるかということが、具体的に提示されている。それを聞かずして、ただ善行についての教訓として受け取るなら、およそイエスの願いからは遠いといえる。それにしても、なぜ私達はサマリヤ人の行いに安らぎを覚え、祭司やレビ人の行いに嫌悪感を抱くのだろうか。勿論、祭司やレビ人にもさまざまな言い分があるだろう。世の常識家は、彼等について同情的な発言をするかも知れない。しかし、私達が素直になってこの出来事を見る時、レビ人や祭司がどのように自己弁護の言葉を語ろうとも、所詮は

弁解にしか過ぎないことを知る。

サマリヤ人の行いはとても素直であった。ちなみに「素直」とは漢字においては「素(もと)」の姿「直(そのまま)」ということであり、聖書においては「混じりけのない」「純真な」ということである。とするなら、倒れている人を前にした彼等の思いを推察するなら、おそらく彼等のだれもが「憐れに思った」であろう。この思いは、所謂「分別」から生じた思いではなく、分別以前の思い、つまり世俗の現実に生きる自我が生み出す反省的な知恵による判断以前に、既にすべての人の根底に働いている「素(もと)からある直(そのまま)の思い」または、「混じりけのない」「純真」な思いなのである。

どのような人も、この場合のような状況に出くわすなら素直に「憐れに思う」。しかし、次の瞬間に人は変わる。世俗的な自我が働くのである。その正体は利己性である。この利己性が分別という大義名文のもとに素直さを覆い隠し、混じりけなき純真さを、不純なものに変えてしまうのである。そのとき、人はさまざまな理屈を並べ立てて自分の正しさを主張する。しかし、どれほど理屈を労しても、他人との関わりに於いて生きるように在らしめられている、人間存在の根源規定、創造に於ける人間の自然を否定することは出来ない。

× ×

人が他人との関わりにおいて生きる者であるという、根源的な在り方には、人は他人との関わ

りに於いて自分になることが出来るという真実が隠されている。

私はわたしだけではわたしになれない。「わたし」は「あなた」に出会って、はじめて「わたし」になる。「わたし」という者がはじめから存在するのではない。これは理屈ではない。世界に自分一人しか存在しないことを想像してみればこのことがすぐに分かる。それは寂しいことだろうなどと思う程度の世界ではない。寂しいも何もないのだ。自分自身の自覚すら生まれても来ないだろう。喜びも悲しみもない。希望も失望もない。満足も不足もない。安心も不安もない。自覚的な生はそこにはない。木石の如き物であるだけだ。

人は隣人に出会ってはじめて人となる。否、人は隣人に出会うことによって、人とされるのである。言い換えれば、「あなた」の発見は「わたし」の発見でもあるのだ。このことで思い出すのは旧約聖書創世記にあるアダムとエバの人間創造の物語である。以下すこし紹介しよう。

神ははじめにアダムを創造なされたが、「人が独りでいるのは良くない」と言い、「人（アダム）を深い眠りにおとされ、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女（エバ）を造り上げられた。神が彼女を人（アダム）のところへ連れて来られると、人（アダム）は叫んだ。「ついに、これこそわたしの骨の骨わたしの肉の肉……」―創世記二章一九節以下―

この物語はとても感動的である。アダムがエバにはじめて出会ったときの叫び声が、今、わたしの胸深くに響きわたる思いがする。彼は感動したのだ。男と女の出会いの感動である前に、アダムがエバに出会うことにより、アダムがはじめて自分自身となり、且つ、自分自身を発見したことの感動の叫びである。人は隣人に出会うことによりはじめて人にされ、人間としての自分自身を発見するのである。

×　　×

しかし、人はこの人間存在の根源的な事実を知らない。対人関係の根底に働くこの事実を知らない。このような、神による定めとしての創造に於ける人間の自然に気づこうとせず、自分は自分によって立ち、自分は自分によって成るのだと思い込んでいる。だから、他人は自分の欲望充足の為にのみあると思い、隣人をそのように見、そのように関わる。このような人間関係の状況から一体どのような事態が起こってくるのだろうか。先に述べた「姦淫の場で捕まえられた女」[10]の話を、思い出していただきたい。書かれた文字としての律法を自分の存在の唯一の根拠とし、それを拠り所として生きることを、神に生きることだと信じて疑わない宗教集団に属する人々に律法違反者として姦淫の場で捕らえられ、イエスの前に引きずって来られた女に、彼等がとった態度は、女を人と見ず、ただ律法違反の事柄と見做(みな)した。だからこそ、いとも簡単に

「石で打ち殺せ」と叫ぶのである。彼等の目の前には「人」はいないし「女」は見えない。目の前にあるのは「律法違反という事柄」だけである。女の悲しい顔も、反省の顔も見えない、彼らは女の顔を律法違反の「罪」という仮面で覆ってしまい、女を罪という事柄にしてしまった。まさに、没人間としてしまったのである。それは「隣人の消失」にほかならない。そのとき、彼等は重大な誤りを犯してしまっていることに全く気づいていない。その誤りとは、隣人の発見が自分の発見であり、隣人の消失は自分の消失であるという神による人間の創造における定め、つまり対人関係の根底に働く神の事実から自分を逸脱させてしまったという誤りである。事実、女の前に立って、罪を捲し立て、石で打ち殺せと狂気のごとく叫ぶ彼らの姿は、最早人間ではない。

だからこそ、イエスは言われた。「あなた方の中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げつけなさい」

イエスの一言は彼等を人間に立ち戻らせ、自分の発見を促した。この言葉を「人間みな罪人だ、どうして女の罪だけ咎めだて出来ようか。よくよく考えてみよ」などと理解してはならない。このイエスの言葉を良心の次元、道徳的な反省の次元のこととしてはならない。

律法を正しく守っているという自分によって自分自身を立てている自分は、その実、律法より深い神の創造に於ける定めによって立てられているのだ、という人間存在の事実を示し、それに気づかせようとした。その結果「年長者から始まって一人一人と、立ち去ってしまった」と聖書

は報告している。

×　　×

再び「善きサマリヤ人」に目を向けるとき、祭司とレビ人に欠けていたものは何だったのか。彼らは常に神を口にし、神の律法を行じながら、人間の存在の根底に躍動し且つ支える働きをしている「神の支配」即ち「創造に於ける人間の自然または定め」としての命の事実を、素直に受け入れる心を欠いていたのである。しかし、かのサマリヤ人は、この事実に素直に従った。利己的な思いも、宗教的な敵対関係にある主義も主張も生ずる以前に、既に自分の根源に働く神の恵みの支配とその事実または定め、即ち「憐れに思った」思いに、素直に生きたのである。その時、彼は隣人を生かすと同時に、自分自身をも人間として生かすことが出来たのである。おそらく、彼は全身で人間として生きている喜びを覚えたにちがいない。

最後に、「あなたも行って同じようにしなさい」とイエスは言われた。それは、隣人との関係の根底に躍動している「創造に於ける人間の自然または定めの事実」に眼をしっかりと向けよ、ということである。そのとき、人は人間となり、本当の自分と成る。

六　共同体の根底に働く事実

イエスは「すべてのものの根底に働く神の恵みの事実」すなわち「神の支配」「天国」を、全身これ指と化して私達に示された。しかし、イエスの弟子たちは、イエスを神の子キリストとして信仰の対象とする教団を形成し布教しだした。

以上のようなことを言うと、すぐに目くじらを立て不信仰を責める熱心なキリスト者がいたり、また、軽薄に同調する人々がいるが、私が申し上げていることは、歴史的な事実をそのまま言っているだけなのである。言うならば、黄色いバナナを黄色いバナナと言ったまでで、そこには何の理屈も感情も交えてはならない。

×　　×

それにしても、イエスは「神の支配」を示し、弟子たちはその「イエスをキリスト」として伝え出した、ということは一体どういうことになのか、その関係をハッキリしておくことはとても大切なことである。勿論、聖書を学んでいる専門の方々は、今でもその関係を整理整頓すべくいろいろと論議をしておられるようだが、門外漢の無能な私などには難しいことは分からない。

それでも、「キリスト教」はイエスから始まったのですか。それとも、イエスの弟子達の信仰理解から始まったのですか、という一昔前に盛んに論議されたことを思い出す。

問われなければ分かったように思っているのだが、いざ正面きって問われてみると、なかなかすっきりと答えが得られないということがあるのも事実である。あれやこれやと思いめぐらすが、とにかく自分自身に、出来ればすっきりとさせておくことは、明確な信仰を得るためには大初なことだと思う。

×　　×

それにしても、私達は「わたしを配慮するわたし」としての「個人性」に生きているだけでなく、「あなたとわたし」という関わりの「対人性」の内にも生きている。さらに私達は広く社会の一員として「わたしたち」という「共同体性」の中に生きている者でもある。言うならば、この三つの私達の在り方が私達の生きている現場なのである。私達はこの現場で人生の悲喜交々（ひきこもごも）を体験し、人間が生きるということがどういう事なのかということをそれぞれに知る。

イエスもこの人生の現場で生きられたが、次に「共同体性の根底に働く事実」について語られることに耳を傾けたい。

×　　×

共同体などというととても難しく聞こえるが、それは人が群れをなすことに於いて始まる。なぜ人は群れをなすのか。人はもともと群れをなす者なのであるとしかいいようがない。人ははじめから関係における存在という定めに在る者なのである、と言える。しかし、その群れが善い群れとなるためには群れの在り方の定めが生まれてくる。それが律法というものである。

イエスの時代にも律法があったが、それは人間の道徳や宗教信仰の在り方を含めた社会生活一般を定めた神の定めとしての律法である。それは、神聖なものであり、その文字の一点一画が生きていくうえでの唯一絶対の基準とされた。この律法こそ十戒を中心とするモーセの五書、つまり旧約聖書のはじめにある五つの文書である。そして、その律法の書の解釈や細則を作る作業をしたのが新約聖書に出て来る「律法学者」とよばれる人々である。

×　　×

イエスが生きた当時のユダヤの社会は、このような神との契約の聖なる書物の文字が、神の律法とし、人々の一切の在り方の基準として支配していた。そして、それに従うことが出来ない者は、神の定めに背いた者として「罪人」と呼ばれた。一方律法を厳格に守り、その実践に熱中するあまり、守れない者を蔑(さげす)み「律法を弁(わきま)えない地の民」と決めつけ、自分たちを「真のイスラエルの成員同志」として誇っていたのが「パリサイ人」と呼ばれた人々である。

×　　×

とにかく神との契約の律法の書は、一切の思想と行動との唯一の基準または究極の拠り所として、ユダヤの民はそれを遵守すべきものとした。そして、そうすることに於いてのみ民族の平和と繁栄とが神によって保証されると信じた。

彼等のこのような律法に対する関係は、日本人である私達には、どれほど学んだとしても実感出来ない部分があるにちがいない。その意味で、分かったような顔をして軽々に批判してはならないと思うのだが、ハッキリしていることは、このような状況の中でイエスが、彼等の律法理解の誤りを指摘されたということである。このことが、どれほど重大な出来事であり、どれほどの覚悟が必要としたかということは、筆舌では到底表せないとこがらなのである。事実、イエスは祭司やパリサイ、律法学者らにより、神を冒涜(ぼうとく)した者として十字架刑というこれ以上の苦しい刑は無いと恐れられた処刑方法で、ローマの権力の協力を得て惨殺されたのである。

×　　×

イエスは「律法違反者」として、パリサイ人や律法学者から告発され処刑された。しかし、イエスほど「神の律法」を大切になされた方はいない。問題は、神の律法の何を大切にするかということである。パリサイの人々は、書かれた律法の文字を遵守することが律法を大切にすることだとした。つまり、書かれた律法の文字を自分の思考と行動上の究極の根拠とする生き方こそ、神の律法を守ることであり、神の正義に生きることだと信じたのである。しかし、イエスの律法

の受容のしかたは律法の文字ではなく、その文字をとおして示されている神の御意志をよく聴くことこそ、律法を大切にすることであり、律法を守るということであると知り、自らそのように生きられた。だからこそイエスは言われる。

わたしが来たのは律法を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。（マタイ福音書五章一七節）

イエスは神の律法の権威を文字の権威とはしない。律法が尊いのはその文字そのものが尊いのではなく、それが神の御意志がそこに証示されてあるからだ。律法を神の律法たらしめている根拠にこそ耳を傾け聴かねばならないとイエスは言われる。律法の文字は、文字を超えて文字の根拠を証示している。神の御意志は文字ではなく文字を超えたところを文字によって証示しているということを、パリサイ人達は知ろうとしない。

× ×

律法の文字そのものに固着するとき必ず偽善に堕ちる。イスはそれを鋭く指摘される。

あなたがたも知っているとおり、「姦淫するな」と（律法に）命じられている。しかし、わた

しは言っておく。みだらな思いで女を見る者はだれでも、ですに心の中でその女を犯したのである。（マタイ福音書五章二七節）

ここでイエスは「みだらな思いで女を見る」ことの正否を直接語ってはいない。姦淫という具体的な行為をしなければ、「姦淫するな」という神の律法を遵守しているのだとする律法に対する偽善性を指摘されたのである。

イエスにとって神の律法は、たんに形にあらわれた文字ではない。形にあらわれた文字に固着すると「姦淫するな」という律法については、どこまでの行為が姦淫でなく、どこからの行為が姦淫の形になるのかという形式論になってしまうだろう。事実、パリサイ人たちは度々イエスの律法違反を、イエスの行為の形を指摘して攻撃批判した。その代表的な事件の一つが「安息日」に人を癒やしたというイエスの行為が「安息日規定」に違反したという告発である。そのとき、イエスは彼らに言われた。

安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない。（マルコ福音書二章）

先にも言ったとおり、イエスは律法の権威を文字の権威とはされない。律法の権威はそれが神

の御意志を証示しているところにある。これは聖書一般においても同じである。律法（聖書）の文字は神の御意志を誌す形であっで、形としての文字そのものが神の御意志ではない。それゆえに、その文字の解釈や適用を熱心に行っても決して、神の御意志に従ったとはいえない。つまり、形は文字の示すとおりであっても、その内容は空虚なものである。律法主義とか聖書主義とはこういうことをいうのである。

×　　×

まず神の律法があり、その上に人間の正しい在り方が成り立つかのように考え、その律法を守ることで安心しようとする在り方がパリサイ人たちである。そのような人達に決定的に欠けていることは、律法がどこから発して、どこへ人を導こうとしているのかということに全く気づいていないことである。

神の基本律法である「十戒」をよくよく聴くなら、それらは文字となる以前に、既にある定めであることに気づく。つまりそれらが文字として神の律法とされてもされなくても、またそれを人間が受け入れても受け入れなくても、全く関係無く、人が群れをなし社会の一員として生きるべく、そこに置かれているかぎり、その根源に、初めから終わりまで働きつづける定めこそ「十戒」なのである。「殺してはならない」とか「父母を敬え」とか「姦淫をしてはならない」などの行為を文字どおりに守れば、それで良いというのではない。人が社会の一員として人々のかか

わりの中に置かれ、生かされているその場に、自ずから働いている根源的な定めそのものが「十戒」なのである。

従って、「殺してはならない」のではなく、その根源的な神の定めのところでは「殺さない」のである。また「父と母とを敬わねばならない」のでなく「敬う」のである。「姦淫してはならない」のではなく「姦淫しない」のである。

×　　×

くどいようだが、もう一度言おう。人が社会を人の都合で形成し、その社会を秩序あるものとするために社会の一員としての在り方の秩序や規定、つまり律法を作り、それに従うのではない。人はもともと人とのかかわりの中で共に生きるべく神に創造され、保持され、完成されるように定められている者なのである。そうして、その根源的な定めが文字という形をとって、その時その場で現成したものが神の律法なのである。言うならば、人が徹底的に謙虚になって自分の存在の根源に気づき、自分が人々との関わりの中で生きる定めのもとにあるという神の祝福に気づくとき、自ずと自覚され、且つ見えてくる在り方こそ「神の律法」なのである。その基本律法が「十戒」である。

だから、イエスは先に紹介した「わたしが来たのは律法を廃止するためだ、と思ってはならない……」の言葉に続けて、次のように申された。

はっきり言っておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消えることはない。（マタイ福音書五章一八節）

つまり、神の律法は、はじめから在り、いつまでも働きつづける、というのである。しかし、律法の文字にしがみつき、その文字に自分の生きる根拠をひたすら求め、人間の生き方に適用することと解釈に明け暮れ、文字をいじくり回しているパリサイの徒には、イエスの律法理解は、ただ律法冒涜者のようにしか見えなかったのである。このような人々は現在でも、教条主義者、形式主義者、聖書主義者として、どの分野においてもおいでになるように思う。

×　　×

さて、先に紹介した「姦淫の女の物語」を思い出していただきたい。（ヨハネ福音書八章一節～一一節）

ここには、「姦淫をしてはならない」という神の律法を犯したひとりの女を前にして、律法学者やパリサイ人とイエスとの対応の違いが明確に提示され、それぞれが自分の生きる根拠を何処に求め、どのような生き様（ざま）をしているのかを知ることが出来る。このことについては、先にやや詳しく述べたので、今は、「共同体性」という側面から考えてみよう。

社会的な存在としての人間にとって、「人間社会をどこで括るか」ということは永遠の課題である。さまざまな個人の生き方があり、それにもとづいたいろいろな主義主張をもつ集団が存在する。これらの立場を損なうことなく一つの纏まりある人間社会、又は人間世界を生み出すためにはどうすればよいのか、ということ、つまり、一切の党派性はいかにすれば克服出来るのか、ということは人間にとって永遠の課題である。

この人間の永遠的な課題に対して、最も代表的ともいえる答えの一つが、絶対的な基準を社会に提示し、それによって人間をひと括りにしてしまうことである。例えば、一つの政治的なイデオロギーを絶対的且つ普遍的真理とし、人間の思想と行動との究極の根拠とすること。また、ある特定の宗教の教義をたて、人やものを神格化しそれを信じることによって、人々を統一化しようとすること。その他さまざまな哲学や科学や経済や法の理屈をふりかざして、人間を統一化していこうとする。確かに、これらはそれなりに意義がある。しかし、究極のところでは、結局人間の自由を保証するものでなく、弾圧と迫害と分裂と争いとを生み出し、最後には崩壊し空しく消え去るということが、これまでの人間の歴史が証明するところである。

よくよく考えてみると、「姦淫の女」を前にしたイエスとパリサイ人や律法学者との対立は、上に見た「人間の永遠的な課題」について答えをどこに見出すか、という問題に対する答えが問われている事件でもあるといえる。

イエスはどのように対処されたのだろうか。次にイエスの答えを聴くことにしよう。

×　　×

イエスを十字架につけ処刑したのはローマの権力者であるが、その権力者に働きかけ処刑を促したのは、パリサイ宗やサドカイ宗、それに律法学者と呼ばれるユダヤ宗教体制の主たる面々であった。

福音書には、たびたび彼らが「イエスを殺そうと考えた」ことが記されている[11]。しかし当時のユダヤ民族は、ローマ帝国の支配下にあり、政治的に独立していなかったので、死刑執行権はローマ側にあり、したがって彼らはローマの権力に蔭謀をもって働きかけ、遂にイエスを自分達の思うような処刑に追い込んで行った。その意味で、イエスを処刑したのは実質的には彼等である。

×　　×

イエスを処刑したことは、まさに狂気以外のなにものでもない。しかし、彼等自身が狂気なのではない。彼等の精神が狂気なのであり、その精神に支配され、振り回され、自分の生き方をその精神によって統一されてしまったのである。

では、彼等を狂気と化したその精神とはなんだったのだろうか。端的に言えば律法（聖書）の文字を、そのままで人間の生きる絶対的根拠となし、その律法（聖書）の文字を遵守するところに絶対の善と正義を求め、且つそのように生きることが神の御意志に従うことだという判断、こ

れこそ彼等の精神であった。

このような精神とは一種の信念であり確信のことである。「そのようにわたしは信じる」ということはおよそ「信仰」ということとは正反対のことなのである。「信仰」とは、「わたしは信じる」とか「信じない」とかいう、私の恣意によることとは全く関係なく、すでに信ずべき真実は永遠の昔から永遠の未来にいたるまで、事実として在るそれに人が目覚めさせられることである。だからこそイエスはこの事実に目覚めなさいと言われる。次の言葉もそのひとつである。

空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父（神）は鳥を養ってくださる。……野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。しかし、言っておく、栄華を極めたソロモン王でさえ、この花の一つほどにも着飾っていなかった。今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなた方においてはなおさらのことではないか。（マタイ福音書八章二五節以下）

花も鳥も「神が養い育てたもう」と聖書に書かれてあるからその文字を信じる信念によって、つまり自分に精神化することによって自分が確信したのではない。もっとはっきり言えば、聖書

の文字がどのように記されていようがいまいが、それとは関係なく、空の鳥も野の花も、初めから神に養われられ育てられていたのであり、育てられており、さらに育て養い続けられる。この神の事実を事実として自分に目覚めさせられ、素直にその事実を受け入れることこそイエスが示された信仰ということである。

×　　×

律法を守ることを、律法の文字を守ることとしたパリサイ人や律法学者たちは、律法（聖書）の文字をそのままで神の言葉とした。そして、いかなる場合にも犯してはならない生きる基準とし律法主義・聖書主義に堕ちててまった。

このような律法主義または聖書主義は、文字により人間を縛ることで自分も他人も統一化して生きようとする一種の観念論的理想主義である。それは形式的、偽善的かつ独善的となり、遂には虚無に人を導くことになる。イエス当時の律法学者やパリサイ人は、民衆の生活感覚に遠く離れており、自分達の宗教観念の尺度で、人々を裁き、ひとり自分達のみが正しいとする排他的独善に生きていたのである。だからイエスは言われた。「彼らは背負いきれない荷物をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうともしない」（マタイ二三・四）

彼等は律法を大切にしているようで、その実、律法を無にし、神を口にしながら神を知らず、祈りをささげながら、その実、祈ってはいない。彼等は自分の内に抱え込んだ宗教観念、自分の

確信、自分の信念、自分の思い込みという精神に於いて生きているだけにすぎない。それだからこそ、イエスは彼等を「わざわいなるかな偽善者なる律法学者、パリサイ人よ」[12]と、たびたび弾劾された。そのような人には本当の平安はない。心の何処かで虚無感が漂っている。それだからこそ、時として熱狂主義になり、多勢を頼みとし、自分達に同調して来ない人々や集団を攻撃し軽蔑し、さらに殊更なる寛容という姿勢で、不安の自分を紛らわそうとする。しかし、それなる者が自分自身なのだと気づく者は少ない。

しかし、そのような自分に気づいた者がいる。その人こそ使徒パウロである。（このパウロについては、後でご一緒に考えようと思っている。）また気づいてもどうすることも出来ず、不安のままに留まる者もある。その代表的人物が「富める青年」である。（マルコ福音書一〇章一七節以下）そして、そのままの自分を善しとして律法主義に生きたのがパリサイ人や律法学者だった。イエスは彼らに「聞いても聞かず、見ても見ず」と、その心の頑なさを悲しまれた。（マタイ一三・一三）

×　　×

さて、先に記した「姦淫の女の物語」にもどるが、もう一度ヨハネ福音書八章一節以下の物語をお読みいただきたい。女をイエスの前に引っ張って来たのはパリサイ人や律法学者達であった。彼等がこのような卑劣な行為を、何故堂々と出来たのかということは彼等の宗教理解、律法（聖

書）理解信仰理解から生ずる精神性によるということは先にも述べたとおりである。

それにしても、この出来事の中に、近代的な人権思想を読み込んではならない。つまり、「この女の人権が無視されている」などという見方はここには当てはまらない。私達の今日的な倫理観や価値観を持って、イエス当時の出来事を見ることは出来ないし、当の近代的な人権の思想、又は今日的な倫理観や価値観というものも、それが現代の高度に発達した産業社会における法意識や倫理観または価値観であるならば、それも現代の人間の情神性の一つの現れにしかすぎないことになる。表現が少し堅苦しくなってしまったが、要するにどれほど立派な精神性の表れであったとしても、それらは所詮、人間の自我意識による統一化現象の一つにすぎないだろう。とするならば、そこには決して普遍的な真実はないし、決してそれを人間の生きる根拠などとしてはならない。しかし、今日私達はすぐに「人権、人権」とお題目の如くに振りかざす。そして、聞く者もそれを金科玉条と見て平伏する。こうなると内容のない「人権」が観念化されて何処でも振り回され罷(まか)り通ることとなる。その結果、人は「人権」を守るために人権を叫ばなくてはならないという奇妙な事態が生じかねない。

× ×

では一体彼等の卑劣さ、醜悪さはどこにあるのだろうか。一口に言えば、それは人のあるべき当然の在り方から逸脱しているところにある。いつも言う如く、人は好むと好まざるとに関係な

く、初めから他人との関わりの中に置かれ、他人との関わりにおいて、人は人となり、自分は自分となるように在らしめられている。つまり、「わたし」という人が在り、それとは別に「あなた」という人が別に在って、それらが互いに交わるという関係が、「わたしとあなた」の関係ではない。「わたし」がいなければ「あなた」もいないし、「あなた」がいなければ「わたし」もいないのである。成り立たないと言ったほうがよいかもしれない。だから、「わたし」の成立は「あなた」の成立なのである。また「あなた」の成立は同時に「わたし」の成立となるのである。つまり、あなたがいなければ、わたしもいないし、わたしがいなければ、あなたもいないという関係が、「わたしとあなた」との事実としての関係なのである。

×　　×

パリサイの徒等は、このような神の創造に於ける人間存在の根源的な事実を見失っている。彼等がこの根源的な事実に素直に立っているなら、決して女に対し、またはイエスに対して先のような醜悪で卑劣な仕打ちは出来なかったにちがいない。しかし、それを平然と、しかも神の正義の施行者として何の疑問も抱くことなく行なえたのは、神の律法（旧約聖書レビ記二〇章一〇節）にそのように記されてあるという律法主義的聖書主義に基づくのである。

ここのところは、特に大切な一点であるので少し説明をしておこう。律法主義的聖書主義とは、聖書の言葉（文字）をそのまま直接的に神の言葉として、その一字一句を生きる拠り処、または

絶対的な基準とすることである。こういうことを言うと、熱心なキリスト者は忽ちその不信仰を責め立てるが、そもそも、そのような態度自体が問題なのではないか。そこには、イエスを律法や神を冒涜する者として怒り狂ったパリサイの徒と全く同じ姿を見るように思う。

神の律法（聖書）の言葉をそのままで神の言葉とするとき神の言葉そのものが「神」や「人の在り方」を限定してしまうという、とても奇妙なことが起こりだす。事実、パリサイ人達は、このようにして「律法を偶像化」し、「神」も「自分自身」も「他人」をも限定してしまった。そして、姦淫の女を石で打ち殺すことを、機械的合理的に神の律法に照応させ、その言葉通りに実行することを神の御意志だと信じて疑わなかった。このような律法（聖書）理解は、遂にイエスを十字架で処刑する正当な理由となった。

イエスは声を大にして言われた。私が来たのは律法や予言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。（マタイ福音書五章一七節）

しかし、彼等に、その声は届かない。イエスが何を言っておられるのかさえ理解できない。

神の律法（聖書）が何処から出てきて、何処へ人を導こうとしているのかを分からないままで、その言葉の一字一句そのまま神の言葉として偶像視してしまった者にとってはイエスは恐るべき

神への反逆者に見えたのである

神の律法（聖書）は神の言葉であるという時、それは、律法（聖書）を通して神がご自分の意志をお示しにになるということであって、逆に神の律法（聖書）がそのままで神の言葉なのではない。もし律法（聖書）がそのままで神の言葉であるならば、律法（聖書）を偶像化することになる。もう一度言うが、神の律法（聖書）の言葉がそのままで神の言葉ではなく、それは神を指し示すものであり、神が律法（聖書）を生み出したのである。因に、「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ……」（第二テモテ三章一六節）とあるが、これは決して聖書の文字の一字一句がそのままで、神の言葉そのものであるというのではなく、聖書の言葉は神の霊によって生み出されたのであるということであり、それは他でもなく、聖書の言葉が何処から出てきて何処へ人を導こうとしているのかということを示しているものである。この一点によくよく注目することを疎かにして、いくら聖書の言葉を調べても律法学者やパリサイの徒と同じ者となる。そして、今日、律法主義的聖書主義に立つ熱心なキリスト者がともすれば陥る誤りがここにあるように思われる。

×　　×

「姦淫の女」をイエスの前に引っ張って来たパリサイ人達は、「先生、この女は姦淫をしている時に捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところ

であなたはどうお考えですか」とイエスに迫った。そのとき、イエスは「あなたたちの中で罪を犯したことのない者が、まず、この女に石を投げつけるがよい」とポツリと言われ、そのまま地面に何やらそれとなく書き始められた。沈黙と静寂がそこを覆った。とすると暫くして、「年長者から初まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中に女が残った。イエスは身を起こして言われた。『婦人よ、あの人達はどこにいるのか、だれもあなたを罪に定めなかったのか」女が『主よ、だれも』と言うと、イエスは言われた。『わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない』」

×　　×

イエスの一言がパリサイの律法主義的聖書主義の立場をひっくり返した。また、イエスの一言が罪を犯した女に今まで気づかなかった全く新しい命と恵みの世界を知らしめた。一体、彼等の直中(たのなか)にイエスが投げ込み提示したものは何だったのか。

パリサイの徒に提示されたイエスの言葉は、彼らの心底にまで達して、そこで眠りこけていた霊性をゆり動かした。自我の世界で精神化し、観念化されて彼らの全存在を支配していた律法に対する幻想性と虚構性とが暴かれると同時に彼らの心底に初めからありつづけていた素直な霊性が目覚め出し、人間の根源に働く事実が彼らを目映(まばゆ)く照らしたのである。彼らは自らの歪(ゆが)みに気づかされ、いたたまれなくなり、次々とその場を去って行った。人は、自我が生み出す自律

でもなくまた他律においてでもなく、自己の存在の根底に働く神の命の事実に素直に目覚めるとき、強いられてでもなく、強いてでもなく、自ずから互いに赦し合い、一つとなる。そして、そこに現成してくる形を「愛」というのである。まさに、愛はすべてを結ぶ帯なのである。

女に向けられたイエスの一言が彼女の心底にまどろむ霊性を目覚めさせた。彼女はその言葉によって、自分の存在の根底に、初めから働いて自分の全存在を無条件に支え続けている神の赦しの事実に目覚めたのである。そこに現成してくる形は「悔い改め」と「新生」である。

×　　×

「神学」を忌み嫌う信仰の人がいる。しかし、そのような人達が語ることを聞き、書いているものを読んでいると、内容はともかく、その人の信仰の神学が色濃く現れているのだが、それをその人たちは自分で気付いてはいない。

勿論、「神学」とは何か、という神学の概念規定にはそれなりの基本的な道筋があるようだが、人により又時代によっても異なる。神学と哲学との違いについても、信仰と理性との関係で、いろいろと、その道の人達が論議している。これらについての難しいことは私などには分からないが、それでも、わたしはわたしなりの思いがあるので、後日に述べてみたいと思っている。

いずれにしても、「学」ということは、洋の東西に共通して「見つめ思いめぐらすこと」であり、しかも、目に見える物や事柄の向こう側、又は、言葉では語り得ない世界を自分に「さと

り」言葉することである。その意味では、人々はどの人も自分の人生について「学」という作業をなしつつ生きている者であるし、聖書に登場してくる人々も、神について、信仰について「学」の作業をなし、それらについてその人なりの「思い」と「ことば」とを持ったのである。勿論、聖書を記した人達も、神やイエスとのかかわりにおいて自分に「さとり」得た思いの世界を「ことば」するという「学」の作業を行なったのである。新約聖書に於けるパウロという人などは、その代表的人物である。これについては後でパウロの信仰を考えるときにゆずって今は先にすすむことにするが、ここで一つだけ言っておきたいことは、信仰は何も考えないで、与えられた教義を妄信することではない。信仰とは、どこまでも自覚的に自分に頂くことであり、一般的に自覚的に頂く態度が「学」ということなのであるという意味に於いて、信仰を「学」として頂くことは当然のことであるし、むしろ「学的」な態度が欠如するとき「妄信」とか「狂信」とかになってしまう。

「信仰」とは当人にとっては、とても重たいことである。その重たさ、こそが「自覚的」ということであって、何も考えないで、与えられた教義を繰り返し聞くうちに、自分がその気にさせられ、信じ込んでしまい、遂に確信に到り、救われたとか、真理だとかいうように自分が思い込み、思い込んだ自分自身を確かな自分だと幻想してしまうことが「信仰」ということではないということを、よくよく自覚しておくべきである。時として熱狂主義的宗教信者や何かの主義

主張の信奉者には、この点において自覚に欠けているのではないかと見受ける方々がいらっしゃるように思うのだが、はたしてどのようなものだろうか。このことはこれくらいにして先に進むことにしよう。

×　　×

パリサイ宗の人々が、律法違反者として連れて来た女に対して、イエスは「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」と言われ、女をその場から去らせられたが、このイエスの言葉をどのように聞くかということは大切なことである。

このイエスの言葉を「罪の赦し」として理解し、さらに、「イエスだけが罪を赦す権威がある方」と受け取るなら、あまりにも教条的すぎるのではないかと思う。ましてや、「イエスこそ、罪なきただ一人のお方であるので女を罰することが出来たのにも関わらず、お赦しになられた、これこそイエスの愛である」と声高に言うのもいかがなものかと思う。そのような発想には、何か既に決定されているイエスに関する正当と思われる理解と思い込みがあって、その理屈と答え、つまり、堅い言葉で言えば、そのような「キリスト論」があってそれに基づいて、出てきた予想される言葉のように思うのは私だけであろうか。先に「教条的すぎる」と言ったのはこのことである。

はたして、イエスは女の罪を赦されたのだろうか。つまりイエスは女に対して、罪を赦すとか

赦さないとかいう思いで先の言葉を語られたのだろうか。

×　　×

罪とは、聖書においてはもともと「律法違反」のことである。神との契約のもとにある人間が、聖書という契約の言葉に、即ち律法に違反するときに人間の側に生ずるのが「罪」ということである。だからこそ、パリサイ宗の人々は、律法（聖書）を犯すまいと熱心に努力して日々を過ごしたし、それ故にこそ彼等は、律法違反者を神に反する者、即ち罪人として蔑（さげす）んだ。したがって、この場合の罪とは、五〇キロメートルの時速制限の道路を七〇キロメートルで走った自動車が速度違反という罪を犯したということで、しかるべき罪に定められるのと同じである。

このように「罪」という概念は律法違反という法的なことがらの言葉なのである。法的な概念には感情はない。だからこそ、先に述べて来た女を、パリサイ宗の人々は律法違反の罪人として臆面（おくめん）もなくイエスの前に引きずって来て、石打の処刑をせよ、と迫ることが出来たのである。

さらに、「赦し」ということを、先の「罪」という概念との関連で言うならば、しかるべき償（つぐな）いをはたすことによって成り立つのが「赦し」であるといえる。つまり、制限速度を越えて走った自動車の運転者は、しかるべき「罰金」を支払うことによって、罪は無効とされ赦されることになるのと同じである。

「罪」とか「赦し」ということは、聖書においては原則的にこのようなことであった。しかし、

イエスはこのような律法的また祭儀的な教条による「罪」とか「赦し」という理解には立っておいでにならなかった。

×　　×

イエスが立っておられ、且つ見ておいでになる現実は、神の限り無きお恵みの事実そのものである。この世界、宇宙の万物をそれとして創造され、保持され、完成される命の滾りそのものこそイエスにとってただ一つの事実（リアリティ）であった。

イエスは、神の限り無き恵みであるの命の働きが、人の側の考えの如何には全く関係なく、すべてに及び、すべてを支え保持している、その事実を先ず知り、触れ、見ておられ、その命の事実を自分が命（いのち）しておられた。だから、その事実のところでは、「自分の命のことで、また自分の体のことで思い悩むことはない」と語られ、「何よりもまず、神の国（神の恵みの命の滾りとしての働き）と神の義（その働きの正しさと確かさ）とを求めなさい（自分の全存在を委ねなさい）」と言われたのである。（マタイ福音書八章二五節以下）

×　　×

イエスにとって、律法違反がどうの、その罪からの赦しがどうの、ということは、第一に重要なことではなかった。これらのことを、人間存在において第一の重要なこととしたのはパリサイ宗や律法学者達であった。又、イエスにとって、人が最も大切なこととして目覚めていなくては

ならないことは、人が罪人であるか否か、または赦されるか否かなどという以前に、人はすでに赦されており、限り無い愛と恵みの内に抱かれている存在であるということである。この第一の神の事実に人が確実に開眼する限りに於いて、初めて人は己の罪にめ覚め、己の全存在的な救いに感謝することができるようになる。

イエスの生涯は、この神の事実の一点を語り、示し、生きることに尽きたといえる。その意味で、これを生きたイエスの生涯そのもの、つまり誕生から復活にいたるすべてが「福音」そのものなのである。決して、一部分の出来事だけが福音なのではない。このことについても後日、パウロの信仰を学ぶときにご一緒に考えてみようと思っている。

×　　×

ある時イエスにパリサイ人や律法学者たちが、「律法の中で、どの掟が最も重要ですか」と尋ねた。するとイエスは「心を尽くし、精神を尽くして、あなたの神を愛しなさい。これが最も重要な第一の掟である」と言われた。これこそ先に述べてきた、すべてに先立ち及んでいる神の恵みの事実を、自分の存在の根底に見ることへの促しである。そして、それに基づいて「隣人を自分のように愛しなさい」と提示された。イエスは、「隣人を自分のように愛しなさい」という掟を第一に示されなかった。どこまでも、それは第一の、すべてに先立って絶対無条件に支え、すべてがその上で起こることを許している根源的な命に、開眼させられてこそ生じてくる第二の

事柄だからである。なお、ここで最後に言われた言葉は、イエスの律法理解を知るうえでとても大切なことだと思う。即ち、「律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている」（マタイ福音書二二章三四節以下）

このような、すべての人に及ぶ神の命の事実、即ち「神の支配」をイエスは全身指と化して提示なされた。かの、「放蕩息子の話」は、神と人とのこの関係をよく語り示している。

また、イエスは言われた。ある人に息子が二人いた。弟のほうが父親に、「お父さん、私が頂くことになっている財産の分け前を下さい」と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りをつくして財産を無駄遣いしてしまった。何もかも遣い果たした時、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困りはじめた。それで、その地方のある人の処に身をよせたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。かれは豚のたべるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人は誰もいなかった。そこで、彼は我に返って言った。「父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、あり余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここを立ち、父のところに行って言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてくだ

さい』と」そして彼はそこを立ち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。「お父さん。わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。」しかし、父親は僕たちに言った。「急いでいちばん良い服を持ってきて、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。」そして祝宴を始めた。（ルカ福音書一五章一一節以下）

ここに登場する「父親」は神であり、「息子」は人間である。父の愛は、神の愛と命との躍動であり滾りである。息子の反目、裏切り、罪、苦悩、悔い改めのすべての出来事にも拘わらず、父の愛は常に、それらを包んで恵み続け、許し続け、愛し続け、息子を保ち続けている。決して、息子が悔い改めて帰って来たので、父の赦しと愛とが発動したのではない。父の愛は、息子のどのような状態においても滾り続けており、息子はどのような時にも、父の愛の許しのもとでこそ放蕩が出来たのである。これは、息子が父を見つける前に、父が息子に走り寄り、息子が父の前に平伏す前に父が息子を抱き抱え、息子が父に言葉を出す前に、父が息子の言葉を包んでしまっている。これこそが、私達に等しく及ぶ神の愛と命の滾りなのである。息子は初めから終わりま

で赦されていたのである。この父の愛が自分自身に及んでいた事実を悟らされたとき息子は、「自分の罪」「自分の愚か」「自分の無知」を知り、そえゆえにこそ「自分の救い」と「赦し」とを体得し、「悔い改め」と「新しい自分」になり得たのである。

彼は、強いれらてそうなったのではない。また、自分に強いてそうなったのでもない。父の愛に触れることによって自ずとそのような自分へと変えられたのである。

× ×

さて、姦淫の女に語られた言葉が、イエスのどこから出て来て、何を女に示しどこへ女を立たしめようとなされたのかということを、すこしは理解出来るのではないだろうか。

イエスはパリサイの徒のように律法主義的聖書主義を第一にふりかざして、女の行為を「律法違反の罪か否か」または「罰として石で打つべきか否か」というような教条主義的行動はなされなかった。それは、女の犯したことを不問にするということではない。そうではなく、女を律法によって罪と決めつけ裁く前に、神の命の滾りの内に無条件に生かされている者であるという存在（創造）に於ける第一の事実のところから眼前に居る女を見られたのである。その事実のところでは、律法も律法違反としての罪も、そして赦すことも、罰することも、悔い改めることも、すべてが、その事実の内で許されて、初めて第二の事としてそれぞれがそれとして成り立つ事柄なのであることをイエスは知っておられた。その意味では第二に生じるすべては、正に第一の事

実に許されていることなのであり、それ自体は善であっても悪であっても、神の恩寵以外のなにものでもないのである。それだからこそ、第一の絶対的な神の恵みの事実に目覚めるとき、自分の犯した事柄が、一体だれに対して、どれほどの深さと重さとを持っていたのかということに気付くのである。先の放蕩息子はそれに気付いた。

イエスは、姦淫の女をして、神の根源的な許しと愛と恵みの命滾る世界を、その一言と態度とによって、女の霊魂の世界に注ぎ込んだのである。

×　　×

イエスの言葉は倫理ではない。倫理とは一般的に言えば、人としてふみ行うべき道、と言うことであるが、別な表現をすれば、人間の内面にある道徳意識にもとづいて、人間の生き方を秩序づけるきまり、のことである。さらに、もう一歩ふみ込んで言うなら、それは、自我に妥当する社会的な規範である。そして、自我はその社会的な規範に自分を当てはめて生きようとする、その努力が一般的に倫理的な生き方ということになる。

表現が少し堅くなってしまったが、ここで注目しておきたいことは、倫理とは人間の反省的な我から出てきた生き方のことだという一点である。その意味では、イエスは倫理を説かなかった。だから、イエスの言葉は倫理ではないと先に言ったのである。

このことを、しっかりと心得ておかないと、イエスの言葉を聞くとき、とんでもない誤解をひ

きおこすことになる。このような誤解を引き起こしてしまったのが、パリサイや律法学者だったのであるが、時として、私達も同じ誤りをおかす。

×　　×

パリサイや律法学者たちは神の律法を、共同体に於ける人間の在り方の、神による規範として（命令として）受け取ってしまった。だから彼らにとって最大の関心事は、そこで命じられている規範から逸脱しないこと、つまりそれをよく守ることであって、守れないということは、とりもなおさず神の命令に背く者、その共同体の秩序を乱す罪人とした。このようにして逮捕され裁くためにイエスのところへ連れてこられたのが、かの姦淫の場で捕まえられた女である。

しかし、律法は共同体の在り方を命じる規範としての倫理ではない。もともと律法は、神を自分の存在の根源的な拠り処、または、命そのものとして、自覚的に生きている人間の在り方が言葉化されたものである。ここのところは、とても大切なことなので、慎重に理解しなくてはならない。つまり、律法の言葉が先ずあって、人がそれを神から与えられた、在り方としての命令的な規範なのではなく、人が神を自分の根源的な拠り処として自覚的に生きるときに、自ずと生じてくる人の在り方が言葉化されたものこそ律法なのである。

だから、神を自分の根源的な拠り処として、自覚的に生きていない者にとっては、律法は自分に与えられた生きる規範としての命令の言葉としか理解出来ないのである。そのような律法理解

のところでは、いつも、人間の在り方の規範としての命令に従うことが出来たか、出来なかったかということが、大問題となってくる。先の姦淫の場で捕まった女は、まさに、パリサイや律法学者たちにとっては「律法に従わなかった罪人」だったのである。このような律法についての考えは正に「倫理的」である。

×　　×　　×

このような倫理的な発想をするのは、パリサイ宗の人や律法学者だけではない。出来る出来ないという倫理的な発想に基づく聖書理解は今日でもある。例えば、イエスの「山の上での教え」と言われている教えの理解においても、「ばか」というな、「愚かと」言うな、「みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも心のなかで姦淫をしたのである」とか……（マタイ福音書五、六、七章）これらのイエスの言葉を、ある人々は、人間がいかに罪深く弱いものであるかを知らしめるためのものであり、だからこそイエスの十字架の贖いが必要なのである。というように理解するが、これなどは典型的な倫理的にイエスの言葉を理解したものである。

イエスは出来るか、出来ないか、自分をみじめな罪人だと思え、などという倫理的な発想はなされないように思う。このような発想はパリサイ的であるし、キリストの十字架の贖（あがな）いによって救われるという発想も、パウロ的であり、ルター的である。イエスの言葉にパウロやルターを持ち込んではならない。（ここで、ことわっておくが、私は決してパウロやルターの考えが間違

っているなどと言っているのではなく、イエスの言葉にパウロの福音理解をもち込んではならないと言っているのである。）

とにかく、イエスの言葉を倫理的な次元で理解しては、イエスを正しく理解することは出来ないと思う。

×　　×

先に学んだ「姦淫の場で捕まえられた女」の事件に再度目をむけてみよう。すでに言ったように、イエスとパリサイ人や律法学者との女にたいする関わりかたは、全く違っている。律法が命ずる規範どおりに生きていたか、いなかったかということが、パリサイ宗の人々の発想である。しかし、イエスは人が出来たか、出来なかったかとか、何をしたか、しなかったかということではない。それらは何度でも言うが倫理的なレベルのことがらである。

「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい」と言って女を赦されたイエスの言葉を倫理的にとるならば、「わたしはあなたを罪に定め裁くことが出来る程に聖い者だが、愛によって赦してやる。さあ行きなさい」ということになる。もしそのようであるならば、イエスという人はとても自我の強い鼻もちならない傲慢者となる。そのような自我から出てきた言葉によっては、人間を変革させることは出来ない。

イエスの言葉は自我の向こう側から出てきた言葉なのである。それは、神の命（いのち）滾（たぎ）る世界から

出てきた言葉である。どのような者も、その命により抱き抱えられ、それぞれがそれぞれとして関わりの内で保たれ生かされている、命の働きそのもの、即ち、神の恵みの働きとしての支配、そのものから出てきた言葉なのである。

×　　×

このような、命滾る世界、つまり神の恵みの働きのもとでは、この世にあらわれ出てきた形としての律法の言葉は消え失せる。罪も赦しもなくなる。敵も味方もなくなる。男も女もなくなる。民族も国家もなくなる。怨みも、つらみも、嫉妬も、復讐も敵意もなくなる。なにもかも無化して、聖めてしまう命の輝きの世界、これこそ、イエスが言う神の支配の世界なのであり、そこから出てきた言葉が、「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」という言葉だったのである。

この言葉は、女の自我に強い衝撃を与え、自我の在り方を根底から揺さぶり、かつてどのような人との関わりからも体験出来なかった、自然な安心と喜びとを自分の存在全体で覚えるとともに、悔い改めと変革とを覚えたに違いない。もはやそこには力みはなく、彼女は新生したのである。

イエスに接した人々の多くは、彼女と同じ体験を自分の内に覚えたのではないだろうか。「律法学者のようでなく、権威ある者のよう」[13]とイエスのことを人々が語るとき、律法学者に対して

は自我の力みと、拘束と不自由を感じ、イエスに対しては自分自身の光となり、安らぎとなり、まったき自由とされる自然な命の世界、生きていることの美しさと喜びとを魂の深みに覚え、それを「権威ある者のように」と言葉したのではないだろうか。

×　　×

イエスの律法理解は根源的である。即ち律法文字の解釈と適用ではなく律法の根原的な妥当性を問われた。つまり、律法が何処から出てきて、どこへ人を導こうとしているのか、ということを問われたのである。

このことを問わずして、律法をいじくりまわすと、律法はただ人間に命令したり、禁止したりする言葉となり、したがって人々の関心は、律法の文字にどれだけ従順であったか否かということだけが問題となる。これは、先ほども言ったように自我レベルの倫理的な規範に律法が成り下ってしまったことになる。そのような理解からは、重箱の角をほじくるような、こせこせした批判や攻撃が互いにかわされることになる。聖書の文字が律法的に受けとられるとき、今日の教会においても、このような陰湿な集団になりさがらないとは限らない。

イエスの教えが世間で共感され、持てはやされる場合にも、自我レベルの人間の理想的な在り方としての倫理と見なされることが多い。しかし世間の矛盾や、現実の不条理の厳しさに遭遇するに及んで、「イエスの教えは現実の厳しさを知らない人達の理想主義にすぎない」と思うよう

になる。それはイエスの教えを倫理として理解した結果であって、イエスの教えとは程遠い。

×　　×

イエスは言われた。「わたしが来たのは律法や予言者を廃止するためだ、と思ってはならない。廃止するためでなく、完成するためである」と。（マタイ福音書五章一七節）

律法そのものの根源的な妥当性を問わないまま、見ないままで、ただ律法の文字の解釈や適用のみに熱心になっている律法学者やパリサイの徒には、イエスの言動はことごとく律法違反、または律法無視のように思われた。彼らは律法について、その一点からのみイエスを攻撃批判した。イエスが律法を見る視点を彼らが理解できなかった理由は、彼らが律法の文字から出発するのに対して、イエスはその律法の文字を生み出した根源的な妥当性の世界から出発されるからである。その根源的な妥当性とは、自我の世界で考え出された妥当性ではない。自我の世界で考え出された妥当性は主義となり、主張となって、それぞれの立場を生み出し、互いに真理性を主張して戦うことになる。ある人に於いて妥当性をもつ真理も、他の人にとっては独断であり、独善的な真理性になる。これは、人間の営みのどの分野に於いても生じることである。勿論、組織として宗教において、また個人の信仰においても生じる。

イエスは、いま一つの自我レベルでの妥当性としての真理を立てられたのではない。イエスに於ける根源的な妥当性とは、言わばいかなる立場もないのである。あるがままをあるがままに示

された命の世界そのものなのである。それが言葉されるとき、「空の鳥をみなさい」「野の花を見なさい」それらは「飛んでいるではないですか」「咲いているではないですか」「それぞれよくよく見てごらんなさい」[14] それらを命たらしめている命の滾りの根源的な妥当性をそのまま人に語られ、行動され、生活され、生きられたのである。そこでは敵も味方もないので、「敵のために祈ることが出来」[15] そこでは、「右の頬を打たれれば、左の頬をも向ける」[16] 世界だと言われる。最早これは倫理ではない。自我の世界の事柄ではない。それらの世界を無化してしまう根源的な命としての妥当性が滾る世界である。

イエスはこのような根源的な妥当性の世界を、一つの物語として語られた。それは、「よきサマリヤ人の物語」と一般に言われている。以下のとおりである。

×　　×

ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服を剥ぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下ってきたが、その人を見ると道の向こう側を通って行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。ところが、旅をしていたあるサマリヤ人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い近寄って油と葡萄酒とを注ぎ、包帯をして自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして翌日になると、銀貨二枚を取り出して、宿屋の

主人に渡して言った。「この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払いますに」さて、あなたはこの三人の中で、誰が追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。律法学者は言った。、「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行ってあなたも同じようにしなさい」（ルカ福音書一〇章三〇～三七）

イエスは、「誰でもサマリヤ人のように、困っている人がいれば助けてあげなさい」と、人が為すべき倫理的な規範を示されたのではない。自分の行為にいつも律法的な規範を求めたのは律法学者達であった。これをイエスが語られる前に、律法学者との対話がある。（二五節～二九節）「何をしたら永遠の命を受け継ぐことが出来るでしょうか」「隣人とは誰ですか」とイエスに問いかける。彼らはいつも、何かを為すというその「何か」を規範として求めているのであり、そしてその規範こそ「律法」だったのである。だから、律法の規範がなくては彼は何も安心して出来なかった。いうならば、自分の拠り処、自己成立の根拠を、律法の文字を規範として、それを倫理的に受け取り、その通りに行うことによって、神の義に生きたと安心し、誇らしく思った。正に律法主義である。その意味での聖書主義は、結局、倫理的な規範主義から所詮は出られないのではないだろうか。

イエスの言葉は倫理ではない。人の在るべき規範を示されたのでもない。倫理や規範は自我の世界のことである。自我に生きる者はいつも自分が真理と認め、正義と信じる主義や立場を主張

し、他を批判する。しかし、イエスには自分の立場などどこにもない。イエスの立場は自我の向こ側うにある。それは、自我が成立する根拠にあると言うこともできるし、律法が律法として現成してくる根拠だともいえる。先のサマリヤ人は、その根拠から自ずと生じてくる命に促され、素直に倒れている旅人に近づいて行った。そのときサマリヤ人の思いの内には、どのような主義も主張も、また、彼を律するいかなる規範も、立場も、「宗教」とよばれる場すらなかった。彼はまさに我（自我）を忘れて、命滾る迫りに促され、まったき自由人として倒れている旅人に近づいて行った。

イエスが語られた物語に登場するサマリヤ人の行為は、一切の理屈を超えて万人が彼に共感する。どのような主義や主張、また、どのような深遠な哲学や宗教を論じ、その思想信条に生きている者であっても、このサマリヤ人が、倒れている人にとった態度と思いとに、無条件で共感するに違いない。　強盗に出会い半殺しにされ、倒れていた人を見た彼は「憐れに思い、近寄って行き」助けた。

彼が近寄って行ったのは彼が持つ何かの宗教信仰によるのではない。また彼が抱く思想や価値観からではない。ましてや、見られている人々の手前の都合からでもない。そうではなく、倒れている人を見て彼はただ素朴に「憐れに思った」からにすぎない。その思いが彼をその人に「近

寄らせ」しかるべき介抱をさせたのである。

言うならば、憐れに思い、近寄り介抱する彼のその生きざまは、一切の他律から全く自由にされた人の姿であり、その自由を自覚的に生きている。

×　　×

この出来事について是非とも説明しておかなければならないことが一つある。それは、倒れていたユダヤ人と助けの手をさしのべたサマリヤ人とは、宗教信仰においてその見解を異にしている集団に属しており、日常には出会うことを避け、会っても互いに言葉を交わさないという関係にあったということである。にもかかわらずそれらの関係や立場を超えて、まったき自由人として、彼が助けの手をさしのべ、その親切の限りを尽くし得たのは、一体彼の何がそのようにさせたのだろうか。イエスが私達に示したいことはこの一点である。

×　　×

先に紹介したこの物語をもう一度読んでいただきたい。倒れている人に二人の人がすでに出会っている。一人はレビ人、他の一人は祭司である。彼らは共に神の律法に従って生きるいわば宗教家である。彼らはみな、倒れている人を見つつ「道の向こう側」を通って行った。しかし、イエスはここで、宗教家であり、信仰人であるにもかかわらず、なんと無慈悲な者どもであることか、と言って彼らを攻撃しておられるのではない。

イエスがここで提示されたことは、律法主義信仰に生きる者の生き方が持つ決定的な誤りである。

すでに何度も記してきたとおり、律法学者やパリサイ宗の人々（それは祭司でありレビ人の人達のたぐいでもあるが）は、書かれた文字としての律法（聖書）を絶対視し、そこに自分の生きる根拠を求め、それですべての事を決定しようとした。つまり律法主義者である。このような言わば律法（聖書）の文字をそのままで神の言葉の権威とする宗教信仰の在り方がもつ問題を、先の「道の向こう側を通って行った」祭司やレビ人に見られたのである。

×　　×

律法主義者はいつも目に見える律法の文字に縛られている不自由人である。しかし、イエスは律法（聖書）の権威を、その文字の権威とされない。目に見え表れた律法（聖書）が尊いのは、それが神の御意志を証示するからである。

大切なことは、人がそのおかれた現実で神の御意志をどう自分に受け、どのように従うかということである。だから、イエスは律法学者やパリサイ宗が行う聖書の解釈や適用の仕方には関心を持たれなかった。イエスは律法（聖書）の文字から完全に自由であられた。この対立と相違とが、イエスを十字架刑に追い込んだのである。このような状況は、今日のキリスト教の体質にもあり、聖書の言葉の根拠を問い、そこで神に出会おうとするとき、忽ち聖書の言葉（文字）を軽

んずる不届きしごくな不信仰者とみなされる。

×　　×

律法（聖書）は律法（聖書）の根拠を示し、人々をそこに向かわしめ、そこに人を立たそうとする。にもかかわらず、人はその文字に自分が立つ根拠を求めてしまう。まさに、この両者の違いが、先の倒れている人の前に立ったそれぞれの人達の対処の仕方に表れたのである。

ここで、もう一度確認しておきたいことは、倒れている人を前にして「道の向こう側」を通って行った祭司やレビ人、の宗教人が偽善者だとか、利己主義者だとかいうことをイエスは語っておられるのではない。ましてや、「近寄って助けた」人がヒューマニストだ、立派な宗教人、信仰人だと褒めそやしていられるのでもない。イエスはそのような次元で「よきサマリヤ人の物語」を提示されたのではない。ましや、かのサマリヤ人のように自分を犠牲にしてでも、困っている人を助けなさい、と人が為すべき倫理を説かれたのでもない。

イエスがこの物語りで提示なされたことは、サマリヤ人をして倒れている人を憐れに思わせ、側に近づき助けの手をさしのべさせたものは一体何だったのかということである。この一点に人が目覚めるとき、人ははじめて自分自身を見出し、隣人を発見し、共同体の真の在り方に目覚めることができるである。

人が為す一切の配慮と計らいに先立ってすでにある事実がある。人は個人として、また、他者

との関わりにある者とし、さらに共同体の一員として立てられ、置かれ、生かされている。その命滾る生命の躍動こそ、神の支配そのものすべての根定に働く事実なのである。その事実の促しに人が素直に自覚的に従うときにのみ、人間は平安を得、愛に生き、平和な共同体が現成する。

かのサマリヤ人は、その命滾る神の促しの事実に素直に従ったとき、彼は「近寄って」いたし、「助けの手」をさしのべていたのである。

いつも人は「自分で何かをしなくてはならない」と思う。そしてその思いが人間を立たしめるのだと考える。しかし、事実はそうではない。すでに立たしめられているのだ、すでに赦されているのだ、すでに受け入れられているのだ。だからこそ人は何ごとも出来るのである。

しかし、この神の命滾る事実を自分の存在の根底に気づくことなく、神を立て、律法を守り、その文字の解釈と適応とを自分でなすことによって生きようとした者達には、独善と敵意に満ちた排他性と、偽善と不安、それに狂信と虚しさだけが残り、いよいよ混乱を招くことになる。事実、イエスはそのような人達に処刑された。だが、彼らが勝利と思ったことは敗北であり、敗北させたと考えたことは、その実、神の命滾る生命の働きの証となって、キリストは勝利も敗北もすべて包み込んで無化してしまい、さらに聖め、神の栄光に変えてしまった。この神の出来事こそ「イエスの復活」の意味である。この神の一方的で絶対的な命の躍動こそ、すべての根底に働く「事実」なのである。

七　再び「事実」をみる

「分からないのか。悟らないのか。心がかたくなになっているのか。目があっても見えないのか。耳があっても聞こえないのか。」とイエスは言われる。（マルコ福音書八章一七節）また「見ても見ず、聞いても聞かず、理解できない」とも言われた。（マタイ福音書一三章一三節）

イエスは人々が、何を悟り、何を見、何を聞くことを願われたのだろうか。

私達はもう一度謙虚になりイエスの言葉に耳を傾けねばならない。私達は既にそれを知っていると思い込んでいる。それについて正しい答えが自分の前にあると思い込んでいる。しかし、すでに在ると思い込んでいる答えは、人が自我の世界でつくりあげた言葉による教義でしかない。私達がイエスについて持っている幻想の一切を捨て切ることから始めなければならない。その意味で伝統的なキリスト教や正統的と言われる教え、さらに、福音的な聖書理解と称されている教えなどの一切を振り捨てて、全く無一物になって、イエスの前に立つことが必要なことだ。

このように言うと、訝（いぶか）る人もあろうが、私が言うのはそれらがすべて間違いだ、誤りだと言